

特116

709

觀世音菩薩



始



特116

709

龍田

夜討曲我

夕顔

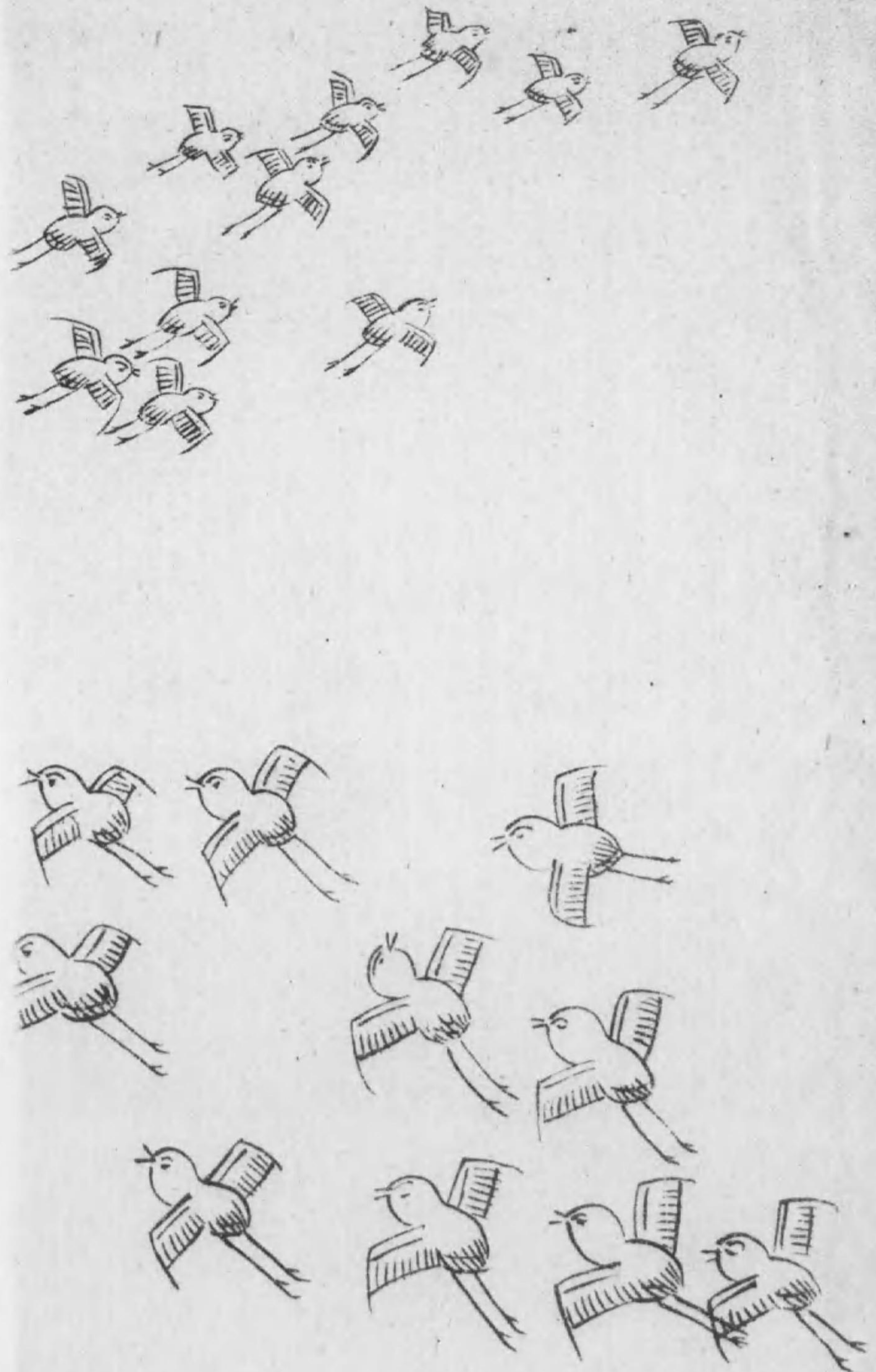
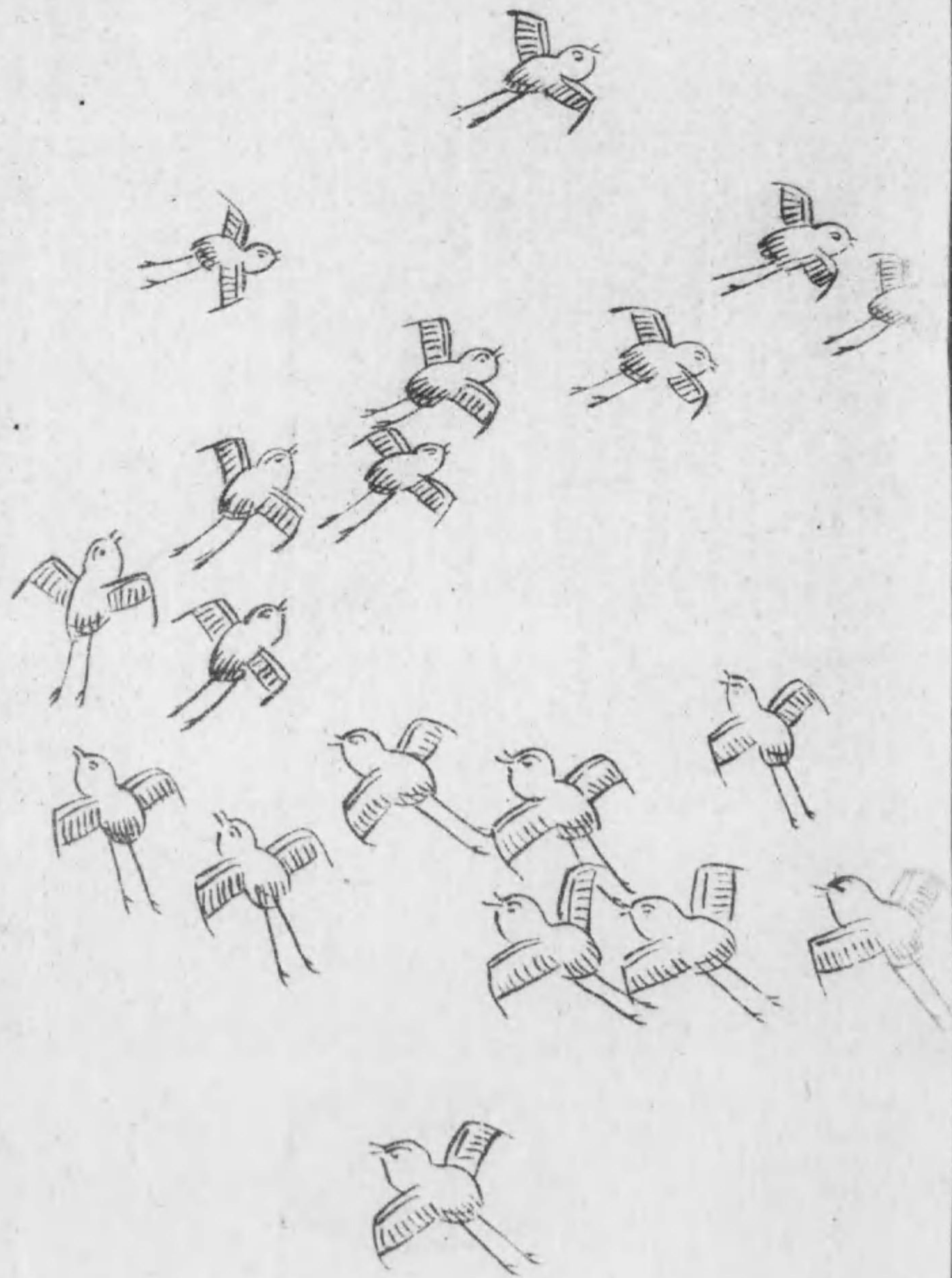
角田川

雲林院

觀世流改訂謄本

四十三







觀之
清之
長世



文學博士

明治四十年

井上頼國 本本文監修
丸岡桂 本本文訂正
親世清之節 附訂正

大正五年

丸岡桂 辭解并補訂
山崎樂堂 拘子附訂正
親世清訂本刊行會 節附様式統一

大正十年

山崎樂堂 拘子附再訂正

龍田

解説

立田といふ名も、古く別名を龍田(立田)といひ、依傍龍田の社に詣でんとして龍田の
神靈に逢ふことを作らり。流布本花傳書に立田の曲名見ゆ。能本作者花文、及び二百十
番流目録に金春善竹の作とあれど古書に之を括すべしもの無し。又者名寄りに龍田紅葉といふ曲
名あるは此曲の仮名をさしと思はる。

謡ひ方梗概

普通は異式の初番目に用ふれど本来四番目物なれば、さして位を静にとらふ。三
輪又は巻物に似たれどもそれらより曲折火く、心持更やかにあるべきもの
す。

シテ

前は素直に尋常にしてどことなかりき氣もあちを宜しとす。時舞はや、調子高に静に
と神料ありの一句、息まひまきすに矢張り和かく、紅葉の歌は帝の御衣をやら、確りと出て其後をすらり
と謡ひ「限るべからず」と稍鎮めて地へ渡す。再びワキとの同着に入りては前と心持を更へて出で、すらりと
承け應ふ。これこそ龍田の明神にて御入り外へは一息おきて指し示すやうに謡ひ起し、「よく、御拜み
外へ」と御由りやかに納む。後は前より位高く勢ありて確りと扱ふべきも女神かれば地々とのみならずや
う心入れを要す。出の「神は非難をきけ給はずは一声の調子にて品好くさうらりと扱ひ、神體深渺たる遊あ
るべく、あれ初初よりこの方は火しく確りと、以下サシよりクセまですうらりと謡ひ、クセの上端は明か
かゝるが宜し、さう程に夜神樂のしより地との撮合に成りて稍心持を更へ、東色づきたる体にて
引き立てめに確りと謡ふ。此内「大方の」云々はワキの調子にて暢びく、と大きからべし。ワキは
て火しく静に、初の「氷下し」云々は調子は更へて出づれども、東は前を承けて扱ひぬやうに附け、すらり
確りと謡ふ。地と定み無く謡ふべし。「下紅葉」云々の下歌は更へて後やかに、上歌よりは調子を起して
すがく、と声振ひ稍舞茶に謡ひて行くべきも、やがて中入とさうらり重なれば固に乗りて輕はづみせぬやうに
附を要す。中に乾き、龍田の廣はほのかにて、「川音も尚さこそまよる」の二所、見ると聞くと遊あさう
に謡ひ、以下火しく鎮の行き、「ハ」ぎやなとより、断心持を更ふ。後は「御殿しきりに」云々をシテよきは
幾分下用に取り心にてさうらりと謡ひ、「和光同塵」より乗つてたつぷりと舞やかに、クワリは確りと、サシ以下
すらりとあるべし。クセは後たれども附けず極めて素直にさうらりと謡ふ。「静たうけり」この打切は初番
用三番目の能の時の外は打切らず、次に後けて謡ふ。「然れば」より更へて出で、「さう程に夜神樂のは前を
承けて運び好く確りと附け、「澄むや」にて鎮の、「再拜」は寛りと、以下撮合、シテと好く守應して観更たる
姿をうつし、「神風ね風」以下調子好く乗つて、のでなく謡ひ納む。

地

初の「氷下し」云々は調子は更へて出づれども、東は前を承けて扱ひぬやうに附け、すらり
確りと謡ふ。地と定み無く謡ふべし。「下紅葉」云々の下歌は更へて後やかに、上歌よりは調子を起して
すがく、と声振ひ稍舞茶に謡ひて行くべきも、やがて中入とさうらり重なれば固に乗りて輕はづみせぬやうに
附を要す。中に乾き、龍田の廣はほのかにて、「川音も尚さこそまよる」の二所、見ると聞くと遊あさう
に謡ひ、以下火しく鎮の行き、「ハ」ぎやなとより、断心持を更ふ。後は「御殿しきりに」云々をシテよきは
幾分下用に取り心にてさうらりと謡ひ、「和光同塵」より乗つてたつぷりと舞やかに、クワリは確りと、サシ以下
すらりとあるべし。クセは後たれども附けず極めて素直にさうらりと謡ふ。「静たうけり」この打切は初番
用三番目の能の時の外は打切らず、次に後けて謡ふ。「然れば」より更へて出で、「さう程に夜神樂のは前を
承けて運び好く確りと附け、「澄むや」にて鎮の、「再拜」は寛りと、以下撮合、シテと好く守應して観更たる
姿をうつし、「神風ね風」以下調子好く乗つて、のでなく謡ひ納む。

ワキ

引き立てめに確りと謡ふ。此内「大方の」云々はワキの調子にて暢びく、と大きからべし。ワキは
て火しく静に、初の「氷下し」云々は調子は更へて出づれども、東は前を承けて扱ひぬやうに附け、すらり
確りと謡ふ。地と定み無く謡ふべし。「下紅葉」云々の下歌は更へて後やかに、上歌よりは調子を起して
すがく、と声振ひ稍舞茶に謡ひて行くべきも、やがて中入とさうらり重なれば固に乗りて輕はづみせぬやうに
附を要す。中に乾き、龍田の廣はほのかにて、「川音も尚さこそまよる」の二所、見ると聞くと遊あさう
に謡ひ、以下火しく鎮の行き、「ハ」ぎやなとより、断心持を更ふ。後は「御殿しきりに」云々をシテよきは
幾分下用に取り心にてさうらりと謡ひ、「和光同塵」より乗つてたつぷりと舞やかに、クワリは確りと、サシ以下
すらりとあるべし。クセは後たれども附けず極めて素直にさうらりと謡ふ。「静たうけり」この打切は初番
用三番目の能の時の外は打切らず、次に後けて謡ふ。「然れば」より更へて出で、「さう程に夜神樂のは前を
承けて運び好く確りと附け、「澄むや」にて鎮の、「再拜」は寛りと、以下撮合、シテと好く守應して観更たる
姿をうつし、「神風ね風」以下調子好く乗つて、のでなく謡ひ納む。

引き立てめに確りと謡ふ。此内「大方の」云々はワキの調子にて暢びく、と大きからべし。ワキは
て火しく静に、初の「氷下し」云々は調子は更へて出づれども、東は前を承けて扱ひぬやうに附け、すらり
確りと謡ふ。地と定み無く謡ふべし。「下紅葉」云々の下歌は更へて後やかに、上歌よりは調子を起して
すがく、と声振ひ稍舞茶に謡ひて行くべきも、やがて中入とさうらり重なれば固に乗りて輕はづみせぬやうに
附を要す。中に乾き、龍田の廣はほのかにて、「川音も尚さこそまよる」の二所、見ると聞くと遊あさう
に謡ひ、以下火しく鎮の行き、「ハ」ぎやなとより、断心持を更ふ。後は「御殿しきりに」云々をシテよきは
幾分下用に取り心にてさうらりと謡ひ、「和光同塵」より乗つてたつぷりと舞やかに、クワリは確りと、サシ以下
すらりとあるべし。クセは後たれども附けず極めて素直にさうらりと謡ふ。「静たうけり」この打切は初番
用三番目の能の時の外は打切らず、次に後けて謡ふ。「然れば」より更へて出で、「さう程に夜神樂のは前を
承けて運び好く確りと附け、「澄むや」にて鎮の、「再拜」は寛りと、以下撮合、シテと好く守應して観更たる
姿をうつし、「神風ね風」以下調子好く乗つて、のでなく謡ひ納む。

龍田

辭解

教の道と秋津國

教への道も明かといひかけて秋津國に倭く。數ある法を修めん

數々の佛の道を修めんといふ意と、數々の經文を圓々に納めんといふ意とを兼ぬ。御經を納むる

見ゆ。聖に傳信の意。南都 今の大和國奈良市。帝部平安(京都)に遷

山の上。大和より河。古き名の奈良 古今集に「神無月時雨ふりおける橘の葉の名におふ宮の古事」ぞ

有明 兜く出る月の西の空に残りをがら夜の明。西の大寺 奈良の西大寺。有明月の残る

外山の紅葉名に殘る 新古今集に「秋津や外山の里や時雨ららん生駒のたけに雪のわかれらる」

龍田川 生駒川の下流。龍田村を過ぐるを龍田川とい

神と人との 神と人との中絶ゆべしとなり。次に

紅葉と申すは當社の神體 龍田明神は龍田

川紅葉乱れて 古今集秋の部に出自なる故。後み人知らずとあれども或人奈良の帝の御教を

御製 高貴の人の所作。家隆 藤原氏新古

龍田川紅葉を閉づる 壬二集に出づ。原歌第二句「しみぢは閉づる」

氷にも 氷にも示す中絶ゆべし

龍田川錦織りかく神無月 古今集の歌の上の句。下の句は「しづれのあめ

氷を踏む 詩經に「戰々兢兢如臨深淵」

巫 女にて神に仕

霜降月 陰曆十月。霜月に同じ。

社頭 神社

神木 神靈の宿

三輪の明神 大物主神。大和國磯城郡三

和光同塵 佛菩薩が徳光をわけ

下紅葉 散りの音を以て塵を

帯取りあへぬ 古今集の歌「此度は

紅葉を帯の神心 古今集に「立田

裳裾をはへて 引きて。龍田

神は非禮 龍田の神の源流清し

水上清し 龍田の神の源流清し

朱の玉垣 光の明けきを赤きに云ひかく。玉垣は

劫初 世界の意。秋津洲 前に秋津國といへるに同じ。日本國の徳島。ふし

御鉢 天壇牙(天逆牙)をさうていふ。神皇正統記に伊弉諾、伊弉册二神が海を操り給ひ

八葉の刃 紅葉の葉の八片に切れたるをそれ。身の刃先と見立て。天逆牙を八坂瓊乃牙

宜禰 神宮の古語。夫本秋に「よよ深ききふねの奥の

あらたに あらた

御鉢 天壇牙(天逆牙)をさうていふ。神皇正統記に伊弉諾、伊弉册二神が海を操り給ひ

八葉の刃 紅葉の葉の八片に切れたるをそれ。身の刃先と見立て。天逆牙を八坂瓊乃牙

とすは 龍の験僧 平家物語に「龍の験僧」と云ふはあれど此詞他に用例を見 法味 佛法の
撰なり。 龍の験僧の法味」と別けて見らばさきにや。高考ふべし。 龍祭の御神 龍祭の御神
龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神

龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神

龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神

龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神

龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神

龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神

龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神

龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神

龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神

龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神

龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神

龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神

龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神

龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神

龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神

龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神

龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神

龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神

龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神

龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神

龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神

龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神

龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神

龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神

龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神

龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神

龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神

龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神 龍祭の御神

四番目 畧勝能 三番目ニモ

羊次弟上 (三人) ヲトシ ヨワク

龍田

十一月

ワシテ 龍田姫(前ハ巫女) 旅僧

教の道も秋津國 教の道も秋津國 教の道も秋津國 教の道も秋津國 教の道も秋津國

數ある法を修めん 數ある法を修めん 數ある法を修めん 數ある法を修めん 數ある法を修めん

南都よひして 南都よひして 南都よひして 南都よひして 南都よひして

み巡りして 又より 龍田越よかり 龍田越よかり 龍田越よかり 龍田越よかり

河内の國へ 古き名の奈 古き名の奈 古き名の奈 古き名の奈

龍田

案として渡り絵ワタリエ給たまふ今思いまひけり
 たり。龍田川紅葉紅ベニにして流ながるあり。
 渡わたり錦中ニシキナカや絶たへあここの古歌ふるうたの
 思おもひ入いりてあここの事こと此歌このうたなり。
 紅葉もみぢの赤あかも葉はの赤あかから錦にを張はり
 如ごとくあここの渡わたり錦中ニシキナカや絶たへあこ
 のあここの事こと此歌このうたなり。

あここの事

紅葉もみぢに申まをする當社あたがやしろの神體かみかた神かみの畏おそ

早はやかた

給たまふ。あここの事こと此歌このうたなり。紅葉もみぢ
 の頃ころも昔むかしもあここの面おもても薄うす氷こほりも
 渡わたりて行ゆく。あここの事こと此歌このうたなり。猶なほも馬うま科か
 あり。水みづもあここの事こと此歌このうたなり。

龍日

三

早かん上

おもひのさ
 不思議な紅葉の錦
 さらば氷も中絶さるるのさ
 さらば事やらん 紅葉の歌八景
 の唐製。又其後家隆の歌。龍田川
 紅葉を閉づる薄氷渡らるるも
 中や絶えあんと重なるやうな詠
 みたれど必む紅葉の限りからむ

●小話

地上歌

氷も中絶ゆる名の龍田川中絶
 ゆる名の龍田川錦織りかく神無
 月の冬川よあるまでも紅葉を閉
 づる薄氷を情もや中絶えて渡らん
 人の心あるをあるたふたふの薄氷
 を踏む理のたふも今よ知られたり
 たふも今よ知られたり 早かん

和光同塵ハ結縁の始ハ相成道ハ
 利物の終地下敷下紅葉塵よさら
 神慮和光の影の色添入てわれ
 らを守り給入や上秋いんたふ此度ハ
 こころらよ此度ハ幣取つあぬさう
 ありよいして吹け嵐紅葉を幣の
 神慮神さびいも澄み渡る龍田の

巖のほのかめて川音も猶牙えまはる
 夕暮し宮廻始めんとて名よ負ふ
 龍田山同くさの榊葉をとうと
 りよよ少女子ぐ裳裾をはへて袖をか
 ぎ軍運よ歩の敷よ度重あつと見
 程よ不思議やあふまでいたな巫と
 見えつらぐわれの真ハ此神の龍田姫ハ

待詔 早表
 神の前は通夜をして神の前は
 通夜をしてありつる告を待たんとて
 袖をかたき臥しよけり袖をかたき
 入らせ給ひけり虎殿に入らせ給ひけり
 社壇の扉を押し開き虎殿は
 光を放ちてくれあるの袖をうちか
 ありと名をつもあむも虎身より
 神の前は通夜をして神の前は
 通夜をしてありつる告を待たんとて
 袖をかたき臥しよけり袖をかたき

後シテ上
 出端一段
 神ハ非禮を受け
 給をき水と清一や龍田の川 虎殿
 頻々鳴動してまねが鼓も聲とよ
 有明の月燈火の光 和光向塵
 おのつから光も朱の玉垣赫きてあら
 たよ虎神體現れたり あり初
 よりこの方此秋津洲の地をよめて

●獨吟サシクセ

是代を守りのは矛を守護。紅葉
 の色もハ葉の刃。即ち矛の刃先
 あるべし。劔の験僧の法味よりかいて
 夜半は神燈明あり。抑瀧祭
 の由神とい即ち當社の由事あり
 昔天祖の教。未明ありは國と
 かや。然にハ當國寶山より至り

●仕舞

天地治まるは代のため。民安令よ
 豊あるも偏は當社の由故あり
 梢の秋の四方の色。千秋のは影
 目前たり。年毎もみち葉ある
 龍田川。湊や秋の泊ある。山も動せむ
 海邊も浪静まで。たのしみのみ秋
 の色。名をて龍田の山風も静あり

能く時ハ
静ありけり
おち

龍田

けり。然る代々の歌人も心を染めて
もみぢ葉の龍田の山の朝霞春の
紅葉よあらねども唯紅色よめで給
へば。つらねの龍田の櫻もそ濃ま。
夕日や花の時雨あらしこと詠みも
くれあふよ心を染め詠歌あり
神あまのは室の岸やくららん

龍田の川の氷濁とも和光の影ハ
明けき真如の月猶照るや龍田川
紅葉紅れ跡あれや古く錦のみ
今氷の下紅葉あらうつらや
色この紅葉襲のうを氷渡ら
紅葉も氷も重ねて中絶ゆべや
いと今渡らん
神

地拍子
夜神樂の

青日

樂カクのキさル程ハ夜ヨ神カミ樂ガクの時トキ移ユり
 事コト去クりてキねラ鼓ツもヒ數カズまリてツキ月ツキも
 霜シロもシ白シ和ニ幣ヒ振ヒりトよシげテ聲コエ澄スむヤ
シテ上謹ヒ上ニ再ヒ揮ヒ
コイ合來キるコト龍リウ祭サマ波ハのナ龍リウ田テンのノ神カミのチ前マエはシ前マエはシ散チらハもミぢチ葉ハ
シテ即ツキちニ神カミのチ幣ヒ
シテ上龍リウ田テンのノ山ヤマ風カゼの時トキ雨アメ

仕舞

降フるコト音ネハシ颯サツ々ツツのノ鈴スズのノ聲コエ
 川カハ波ハハシそノ白シ本ホン綿ワタ神カミ風カゼ松マツ風カゼ
 吹フきコト乱シれテ吹フきコト乱シれテもミぢチ葉ハ散チりト飛ト
 ぶシ本ホン綿ワタ附ツキ鳥トリのノ衣イ被ヒもヒ幣ヒもヒ翻ヒるコト小コ
 忌イミ衣イ謹ヒ上ニ再ヒ揮ヒ再ヒ揮ヒとシ山ヤマ河カハ
 草クサ木キ國クニ土ツチ治シまリてキ神カミハシあガらシせテ給タマ
 ひケり!

青日

て社製なりしこと諸君に見えたるを引く。昔
 杖物語には五郎の杖に此洞を用ひたり。
 烈しく斬り合ふこと。しのぎ(編)は刀の
 刃に添ひて火(高)なりたる部分の條。
 取山住して十六の年師匠の杖を打ち(中書)後此居に未りたり。
 しが、履物の荒馬束の刺の者、七十五人が力を持ちけりし云々。
 打ち懸け 鎧の胸の下につきて履の
 たるなり。 草摺 廻りに垂れたる部分。
 唐戸 唐風に作 運提弓 運のまきくまを提弓に掛く。こゝには深き意味なし。善界
 此ら板を 運提弓の八しまでの波のしをどあちを借りたるにや。あたが
 み 部分の肩の かけまくも 言葉に掛けて云ふまでもなくの
 中ごろ華府に所りて今日 意。慢を懸くに云ひかけたり。めでたけれ ありしけれなど
 の如く流ひ受へしなりん。

張良

同じく高祖の功臣。智謀
を以て用ゐられたる方時。

しのぎを削り

御所

後朝の居
所をさす。

五郎丸

昔杖物語に「こゝに五郎丸とて所
察に召し仕らく書あり。(中書)

鎧の袖を解き

鎧を軽々と着因の
んたの其袖を除きて

さつく

音の 形客。上には薄衣

を打ちかけたなり。

唐戸

唐風に作
此ら板を

運提弓

運のまきくまを提弓に掛く。

さつく

音の 形客。上には薄衣

を打ちかけたなり。

み 部分の肩の かけまくも

言葉に掛けて云ふまでもなくの

めでたけれ

ありしけれなど
あるべき所なり。

四五番目
畧二番

夜討曾我

五月

曾我十郎祐成
 曾我五郎時致
 團三郎
 鬼五郎
 御所ノ五郎丸
 軍兵(三人又五人)

五十
 十郎
 次弟上
 名王
 ツダク

其名も高き富士の嶺の。其名も高き
 富士の嶺の。は狩よいざや出でせしよ

十郎伯

このい曾我の十郎祐成よての。さても

我が君東八箇國の諸侍を集め富士

の巻狩をさせらる向。わんら又弟

もくもな女よまあうせで。誰今富士の

夜討曾我

裾野スサノのなみだから サン上人のあはれいとし舞
 こころお田の思くが猶もつらむいへ
 名残ナノコをノ残ノも我ら宿ヨクのナ名残ノをノ残ノも
 我ら宿ヨクの垣キねの雲クモの卯ウの花ハナのハ咲サキも
 散チる花ハナの名残ナノコぞと我ワらハ柄ハやハ素スが
 りリ。富士フジの裾野スサノよ著ツキまよりの富士フジ
 の裾野スサノよシおシおシわシらシ 十郎程ほどよ

こころはなや富士フジの裾野スサノよシおシわシらシよ
 時致トキチ然シカるべお處トコロの幕カキをヒらヒたヒたヒらヒら
 畏オソるコころノ 十郎時致トキチ今イマよハ始ハめハぬハ所トコロ
 事コトあハりハぬハも我ワら君キミのハ感カ光ヒのハめで
 たハらハいハらハおハちハ並ナりハたハら幕カキのハらハちハ目メを
 驚オドロかハたハらハおハちハおハちハいハらハ 十郎あハらハいハらハ
 多タくお入イれハの中ナカのハおハちハおハちハらハ幕カキの

Main body of handwritten text on the right page, consisting of several lines of cursive script.

Small handwritten text or mark located at the top left of the right page.

Main body of handwritten text on the left page, consisting of several lines of cursive script.

も頼まのむも老いたるも残り世の習。
 飛花落葉の理とおぼめされよ。
 其時時致も肌のままもりを取り出し。
 とのし時致が形見よ随入り入形見ハ
 人のあき跡の思の種と申せどもせめ
 て慰む習あしむ時致ハ母よよ添ひ
 申したると思めせ今までも其言を。

守佛の觀世音此世の縁なくと來せ
 をたなまけ給へや十郎上既よ此日も入
 相の鐘もはや聲ごよ諸行無常と
 告げ渡さるるよ急げ急げ使涙を。
 文よ羨まき龍めて其まやる文の干ぬ
 向よと誂せし人の心まで今更思ひ
 白雲のからや富士の裾野より曾

我子歸しては業からくしと見
送りしては留まる家なよ
とまゝのまゝかき
早鼓中入

軍兵一セイ上

寄せあげておりの音高く関を

作つて騒まけり
早鼓 (謡掛) 五郎上

兵やもあつらふ業討たんと多く

の勢ハ騒まあつていさを出し途と見

えだのぞや十郎殿十郎殿何とお

返事ハあつて十郎殿青よ新田の

四郎と戦ひ給ひらあつてはや討たれ

給ひたのよあ口惜しやあつて骨を

一所の思ひり物思ふ春の花盛

散りくはあつてあつて骨を

さらさら無念やあ身方の勢ハ

北拍子
身方の勢ハ

打上調頭打切

とらへて見えて。身方の執りこしを見て。
打物の鏝もこころけ時致を目。
けて懸りけり。あら物。やおのれ。
らよ。あら物。やおのれ。よおのれ。
よ手並。知らしものさ。太刀取り。
直。まじつた。氣色。譽めぬ。こぞ。
あらけり。あらけり。所よ。あらけり。

新語集

十一

地拍子
斬つて懸り

所よ。は内方の吉屋五郎。樊噲が怒を
あ。張良が秘術をつつ。五郎が
面よ。斬つて懸り。時致も吉屋五郎が
抜いた。太刀の鏝を削り。暫しが程。
戦ひ。何と斬りけん。吉屋五郎ハ
こつよ。あつてぞ。見えたりけり。
ける所よ。あらけり。所よ。吉屋五郎。

新語集

十一

丸唐前よのいたてあきらものちと
 肌ヒの鏡の袖を解き草摺あらげよ
草摺あらげよ
 さつくと投げ掛けよはらきを衣き
 被き唐戸のあきらを待ちあけたる
 今カの時カも軍搦らの今の時カも
 運カ搦らのカも落きて真の女ごと
 油カ断カして痛むやり馬ごとお並入

組あむむむむむむ組あめむ
 五郎丸
 吉所の五郎丸あら物ごとわだ
 かみ搦んでさいやさいやと組みこら
 んで時致よありける所を下より
 えいやと又押し返し其時大勢あり
 重かあつて千條の繩かかけまかくもか泰
 るかくも君の馬前よ追かつかきて行くこと

元一 字ニラ
めでたけれ

夕顔

解題

夕顔の上は源氏物語中の人物。三位中將の娘なり。が幼くて父に別れ、長けて現の中將と契り玉葛の君と主ム一人なり。その後中將の北の方のものがあつて懼れて乳母の家に身を隠す。地が五條の君と契りたがへりてあり。時、其家の軒に夕顔の花の咲き、成たふがえに。一となりて源氏の君と契りてこの、八月十五日の夜源氏と同車にてあたり近き所がの院(六條河原の院)に移りたるに、その十六日の夜物の氣に禁はれて空しくなれり。夕顔の上十九歳、源氏の君の十六歳の時の事なり。此曲は玉葛の君にゆかりある豊後の國の依留が秋夕顔の上の亡霊に述べて、致して成佛せしむることを作れり。古く別名と源氏夕顔とも云ふ。親元日記に寛正六年二月親世が上流せし記録あり。能本作者註文に世阿彌の作とす。

能之變式

山の端の曲の時はワキの左若以下常の通りに着きてセリフとなり、「志どほ程に、山の端の心も知らずいふと誑ひ出す。以下、サシ、下歌、上歌を抜き、ワキの詞、かにかにこれなる女性にま々に懐く。夕世の中にも縁なきありて、はかなかりける時端の後の打切垂くなりて心持あり。奥にて能位重くなりなり。

謡ひ方梗概

源氏物語を基としてたる變物にて半部と姉妹曲なり。應
トて由來とる。一、安後、一、奥懐、一、風情なるべし。シテ 前段は優に品よく
果敢なげなる趣なるべし。山の端の曲は一聲の中音にて靜に味よく誑ひ出。山の上は忽によりク
りの調子に取りて前よりはサシ位と進め、サシ以下、下歌上歌に互りては古く思ひ身を佗ふるものなれ
ば、聲を控へぬに、清沈み勝ちなるを宣いとす。ワキとの問答は、一とよかに某什應へ、又夕顔の疾
のせよより和らかに、つて誑ふ。クリは、ヤ、氣を起して直ぐ、と扱ひ、次のサシ以下すなりと、ク
セの上端はゆるやかに大らかなるべし。後、前よりも華やかに、調子も低からぬやう、一併にすなりと
扱ふと宣いとす。此心得にてサシと誑ひ、ワキとの掛合順次に氣を束せて付き、地渡りの前の、後姿
寒が、一、聲の調子に改め、詠吟の心を以て大きくゆるやかに扱ふ。お僧の今のの下
地との掛合は解脫を喜ぶ心なれど、然も浮き、せぬやう、舞に品よく来るべし。ワキ 變物な
して物采らかに品よく誑ひ、
シテを引きたるむべし。地 心若提心と動めて、云々はシテを承けてさらりと誑ひ、サシ以下す
シテを引きたるむべし。地 心若提心と動めて、云々はシテを承けてさらりと誑ひ、サシ以下す

夕顔

情あるやう扱ふべし。後は「来んせも津もよまて」被けぬやうシテの氣を承けて病をとり心に附け、通りよ
り續めて辭に、通して大事に扱ひ、舞すみてシテとの掛合は少く確りあるべし。幸ひは晴れく
したる心にて、後に延
びく」と誼ひ納む。

注意すべき誼ひ方 六段と六行目の辭らぬの節附は、誼ふ上にては「て」を難き節をならざれども、也
の、五哀との節と同様に、二百番中此二番以外に無き特殊の扱ひなり。

辭解 豊後の國 豊後の乳母の子豊後命が筑紫にて夕敷の遺子玉葉にかりつき居たる縁に
て、也 豊後の國と豊後に作れり。後に、其玉葉のゆかりと云
はんたぬの用

松浦相崎 肥前松浦の鏡の宮と、筑前相崎の宮とを指す。原
氏物法玉葉の巻に「近き終に八幡(男山八幡)とす」の言と申すは
彼處(玉葉)の居が久しく住み「筑紫とす」にても春り新り申し、故に松浦相崎國ト社ト
りしとあやを傍る。松浦相崎の神の誓も勝れたれどそれよりも更に名高き男山に奉らんとなり。**男山**
男山八幡宮。山

雲の林 豊後郡大徳寺の南、毎岡の東にあり。**紫の野** 筑野とす。今の
城國殿喜郎。愛宕郡大徳寺の南、毎岡の東にあり。**紫の野** 筑野とす。今の
ち字東紫竹大門の地。

賀茂の御社 上賀茂の社とす。 **亂の林** 下賀茂の社のある
秋草の花の紫に掛く。 **歸る宿りは在原の** 宿りは在りといひかく。伊勢物法に、在原の
郡下鴨村の東。

五條 今の京師ね **あばらや** 筑れた
身にしてと誼めりと思えたる昔を引く。

も知りぬ 源氏物法夕敷の巻に源氏の君「大威のめ」と(惟光の母)ととぶらけんとし五條
をひて夕敷の上に通ひたる **屋づま** 家の
を心に置きてかく隠る。

巫山の雲は 若楚の東王、高唐に遊びて夢に神女に逢ひ
の空にて影やたえなむ。

忍ぶ草 源氏物
のふかたぐいりきき宿かな **忍ぶ方々** 前の歌をうけて、源氏と夕敷との如く、
全葉集に「は」にて「は」の思ふ草
なり。

紫式部が筆の跡 源氏物法夕敷の巻に「そのわたり何
なり。」 **何某の院** 源氏物法夕敷の巻に「そのわたり何
なり。」

執心の心 涙の雨は **真如の月** 遠く隔無く真の性に覺めた
涙を雨にたとへし詞。後のよの障とは後の夜

むなしく空に 新古今集に「は」のむなしく空の浮雲は身を知る雨のたより
せうにや。心の浮雲とは心にかゝる障。む

世を隔て 時代を **光る君** 光源氏 **露の世** けかな **上なき思ひ** この上も
なりき空とは思ひてもかひなき空の意。 **融の大臣** 嵯峨天皇の皇子にして世に河
原の院と直に河原の院

鬼の形 河原の院にて夕敷の死に一時、変化の女の姿見えたるも、同じ巻に「南殿の
鬼の形」は、又鬼瓦といふ詞を連類として、はも

河原の院 六條にあり。融大臣の御。其死
も久しからずして廢家となれり。旧蹟明ならず。源氏物法中、変化の女に夕敷のよられし
場所を直に河原の院と云ふ書かれて河原の院とは無けれども、こゝには後世の説により、其方に
がの院と直に河原の院

玉葛のゆかり 玉葛(夕敷の上の子)の君の因縁ある豊後の
こと、いして作れり。

玉葛のゆかり 玉葛(夕敷の上の子)の君の因縁ある豊後の
こと、いして作れり。

玉葛のゆかり 玉葛(夕敷の上の子)の君の因縁ある豊後の
こと、いして作れり。

玉葛のゆかり 玉葛(夕敷の上の子)の君の因縁ある豊後の
こと、いして作れり。

玉葛のゆかり 玉葛(夕敷の上の子)の君の因縁ある豊後の
こと、いして作れり。

玉葛のゆかり 玉葛(夕敷の上の子)の君の因縁ある豊後の
こと、いして作れり。

玉葛のゆかり 玉葛(夕敷の上の子)の君の因縁ある豊後の
こと、いして作れり。

玉葛のゆかり 玉葛(夕敷の上の子)の君の因縁ある豊後の
こと、いして作れり。

玉葛のゆかり 玉葛(夕敷の上の子)の君の因縁ある豊後の
こと、いして作れり。

玉葛のゆかり 玉葛(夕敷の上の子)の君の因縁ある豊後の
こと、いして作れり。

玉葛のゆかり 玉葛(夕敷の上の子)の君の因縁ある豊後の
こと、いして作れり。

て跡と平は 言葉幽艶 源氏物語と解きたる源氏抄に「言葉幽玄、義理甚深」とあり

心菩提心を勧め 又、此物語は或者必哀會者定壽生老病死有為轉變の理を深くのす。

六條の御息所 六條に住み給ひ 源氏の長惟光が母天武の乳母の家を、六條に通ふ中宿と

玉鐙の 道に冠する枕詞をこれに直に道に用ふ。源氏の君の

物にあやめも 夕景の巻に物にあやめも見候へわくべき人も侍らぬわたり云々とある

軒のつま 軒のつまは、源氏の君の夕景の宿

情置きける 源氏の君と夕景の上と

秋の契とは 源氏の君と夕景の上と

東雲の道 光原氏と夕景と二人車に乗りて、夜の明けゆく

蛸の 命の短き夕景の命のはかなかりに死し、夕景の巻に「命をか

宵の 夕景の巻に「宵過ぐる程、少いねいり候へるに、變化の出でたる由を記し、又

の間過ぐる古郷の 夕景の巻に「宵過ぐる程、少いねいり候へるに、變化の出でたる由を記し、又

く聞えて云々など記 燈火の 同十巻に「心の中に燃ゆる、心ちりて

鳥羽玉の 古今集の歌に「うは

思川 水に思ひぬふ意にて思川と云ひ、後撰集の歌「思川地へ平流

ありつる女も 夕景の巻に「ありつる女も、へろを受け、かく物語り

五障 佛教にて女にあり

山の端出でし 新古今集の歌

気味き秋の野ら 夕景の巻に「かき草木などとはことに見所

優婆塞が行ふ 源氏の君が行者の秘の聲を聞きて夕景の爲に「よみ」歌、此

夕景の笑の眉 夕景の巻に「白き花をみかひしり、笑みの眉ひらけた

變成男子 法華經授婆品に、八歳の子女が佛に帰依したる功德に

解脱 煩惱を解きて迷

何ぞつまん 古今集の歌「つまん

青羽山 清水寺のある

横雲 晴の山辺に横

東雲のまゝ 前の東雲の道 あけぐれ 夜のあけんとしつ
の取と引く。 願けのくらきことまふ

三番目

夕顔 エウガオ

九月

ワシキテ

旅 夕顔ノ上(前、里女) 僧

勝れたん中
せむ

早稲 豊後の國より出てたる僧にてい。

さても松浦箱崎の誓も勝れたん

申せども猶も名高き男はよ集らこと

思ひ此程都よりしてはむなむな

出で佛岡の集いさや思ひる サシ上 尋ね

見る都よはしる名所はまづ名も高く

夕顔

聞えける。雲の杖の夕日影。うらうら
方ハ秋草の花紫の野を分けて
賀茂の社伏拝み賀茂の社
伏拝み紅の森もらち鳥居にて帰る
宿りハ在原の月やあらぬところける
五條あたりのあざらやのまも知らぬ
處まで尋ね訪して暮らける

尋ね訪して暮らける 急ぎ
程よいははや五條あたりにあつげ

あの産つちやう

よの不思議やあもの屋づまより女の
歌を吟ぎる聲の聞えの暫らく相待
ち尋ねたやと思ひは 山の端の
ところも知らず行く月よの空よて
影や絶えあん 巫山の雲ハ忽ち陽臺

頃

二

見事よむらも^{シテ}豊後の國の者。其
 ぶ葛のむらも^{シテ}あつて今又み顔の
 露消え給ひ^{シテ}世語を^{カレ上}かたり給へや
 所跡を^{シテ}及びむらも^{シテ}身も^{シテ}甲せん^{シテ}折光
 源氏物語^{シテ}言葉^{シテ}幽艶を^{シテ}基として
 理^{シテ}浅き^{シテ}似たり^{シテ}心^{シテ}菩提^{シテ}
 心を^{シテ}勧め^{シテ}て^{シテ}義^{シテ}殊^{シテ}は^{シテ}深^{シテ}誰^{シテ}も^{シテ}假^{シテ}も^{シテ}

語り傳へん^{シテ}中^{シテ}も^{シテ}此^{シテ}類^{シテ}の
 卷^{シテ}六^{シテ}殊^{シテ}は^{シテ}勝^{シテ}り^{シテ}て^{シテ}哀^{シテ}ある^{シテ}情^{シテ}の^{シテ}道^{シテ}も^{シテ}
 浅^{シテ}く^{シテ}も^{シテ}契^{シテ}り^{シテ}給^{シテ}ひ^{シテ}六^{シテ}條^{シテ}の^{シテ}は^{シテ}息^{シテ}所^{シテ}よ
 通^{シテ}ひ^{シテ}給^{シテ}よ^{シテ}よ^{シテ}ま^{シテ}が^{シテ}よ^{シテ}寧^{シテ}り^{シテ}中^{シテ}宿^{シテ}よ
 唯^{シテ}休^{シテ}ら^{シテ}ひ^{シテ}の^{シテ}玉^{シテ}銚^{シテ}の^{シテ}便^{シテ}り^{シテ}よ^{シテ}ま^{シテ}て^{シテ}
 馬^{シテ}車^{シテ}あり^{シテ}物^{シテ}の^{シテ}文^{シテ}目^{シテ}も^{シテ}見^{シテ}ぬ^{シテ}あた^{シテ}りの
 小^{シテ}家^{シテ}か^{シテ}ち^{シテ}ある^{シテ}軒^{シテ}の^{シテ}つ^{シテ}ま^{シテ}よ^{シテ}笑^{シテ}か^{シテ}り

たる花の名もえもみ見たり夕顔の
やう思はるゝとあだ人の心の色は白
露の情置をけるまの葉の末を哀と
尋ね見し圍の扇の色しよよまよ
秋の契とらあまのり東雲の道の
迷の言の葉も此せらるゝありはらな
かりける浮遊の命懸けたる程も

なく秋の日やまゝ暮ははてし宵の
向陽の影の田の松の響も深らるゝ
風は瞬く燈火の首の思よこ
ちしてあたりを見れば鳥羽玉の圍の
現の人もあくしよせし思川らた
かた人の息消えて帰らぬ水の泡と
のみ散りはてし夕顔の花ふこたひ

嘆かめやと。草むらも草むらして申おきて。
 おくしひの女もあはれ昔かよもあはれ
 りかあ昔かよもあはれ昔かよもあはれ
 早早上上教教 (三人) 侍侍 誥誥
 かねかよもあはれもあはれもあはれもあはれ
 まがし。回見あつらひ明かす。法華
 讀誦の聲絶えむ。早早法法ぞ誠誠ある
 早早法法ぞ誠誠ある。後後三三上上 一早早法法ぞ誠誠ある。早早法法ぞ誠誠ある。

五障の罪業か。阿の氣疎た。物
 の氣のへきひ。有様を現も今の
 夢人の跡よ。くもむらひ。給く。あま
 早早かか上上 打上上 不思議や。か。く。音の。回。の。は。の。端。出
 下。目。影。の。ほ。の。目。は。そ。め。夕。顔。の。
 末葉の露の清え。易あ。本。の。栗。の。せ
 語を。か。けて。現。給。く。ら。見。給。く。

野らふ

さもおのりから。氣き疎そき秋あきの野のらと
ありて池いけの水草すゐくさは埋うもれてあう
たる松まつの蔭かげ闊くわく又また鳴なき騷さわぐ鳥とりの
から聲こゑ身みよき又また渡わたるあうからち
かもの物もの濃のく思おもひ給たまひーの水みづは
濁にごりよ。ううちれてから身みとあれども。
優やさは寒ふ塞さい行ゆく道みちををふふるるまで 刺さん

仕舞 打上 中

せも深ふかき。契ちぎ絶たえまお契ちぎ絶たえまお 序舞
お僧おそうの今いまの吊たびや受うけて 地ち上じやうお僧おそうの
今いまの吊たびや受うけて。多おほく喜よろこばしやと
外と顔がほの笑わらの眉まゆ一ひと用もちくる法はふ華けの
花はな房ぶどうも 地ち上じやう変か成な男おとこ子の願ねがひのまゝよ
解と脱だつの衣いの袖そでああらら今いま宵よの何なにを
つまんとぞよおと思おもへが音ね羽う山やま嶺の

夕顔

地拍子板
二二二
三三三
四四四
五五五
六六六
七七七
八八八
九九九
〇〇〇

二二二
三三三
四四四
五五五
六六六
七七七
八八八
九九九
〇〇〇
松風通ひ来て。明け渡る横雲の迷
もあや東雲の道より。法よ出づる
ぞと。曉闇の空かけて。雲の紛れよ。
失せよけり!

隅田川

解題

角田川とも書く。人商人に誘はれて東に下り隅田川のほとりにて空しくなり。梅若丸の母、狂氣に達したる子を行くを尋ねて東に來り、隅田川の渡にて梅若丸の死を聞き、其墓所に廻向して亡霊に逢ひたることを作れり。能樂以前に所傳無ければ、全く作者の創意にかゝるものなるべきも、法構修辭の妙人を動かすこと能く、後世此曲に附會したる本母寺の縁起を生み、梅若丸を生み、更に梅若丸王社を生むに至れり。其相現に東京向島に存し、毎月十五日を以て縁日となせしを、見れば此曲の影響亦大なりと云ふべしなり。世子六十以後申樂法儀、歌舞體能記、五音三曲集等に記録あり、能作者注本には世阿弥の作とす。二百十番譜目録には元雅の作とすれども、古き書籍に此事無し、上演に就きては看圃日記(永享四年三月、仙洞)、申樂法儀(書中後人の加筆の中に、永正十一年十月南都西喜の院)親元日記(文明十五年三月)等他曲に比して記録少からず。

謡ひ方梗概

狂女物は邂逅の喜びを以て局を結ぶが常なれども、本篇にありては其喜びを遠くに映し、青柳屋に夢に似たり。前には恩愛に抱ひ後には悲數に亂れ、斯くて遂に表心に於る處、本篇の味はうて溢ふべき所以と、ふべし。後急に富み心持多く節振ひの變化密に入り徹に互りて、狂女物中最も繊細の技巧を要するものなれば、常に節の上下にのみシテ、出たり隅田川に看く、狂女物の切なる旨とて、一かも洗滌に陥ること無く、舟に東らんとする所よりは、子のことを忘れて興ずる味なれば、前後を通りて、未節の抑揚こそ多けれ、大局に於ては他の狂女と其姿同トやうなるが好し。一度ワキの法を聞いて、のり舟人と同ひ初むる所よりは、漸く本曲の深刻なる技巧に入るものなり。まづ出のサシはづかりと出てすらくと運ぶ心なかり、一つぼりと浮き立ち兼ぬる憂を待ちて、さりとて餘り洗まぬやうに溢ひ進むべし。間くやいかにより一聲の調子に更へ、歌手になりぬを度としてや、大まかかたに引き立て、真葛が原の雲のせには、情力をこめて唯りめに溢ふ。これは都北白河に以下再びサシの調子となり、前のサシよりもすらくと、一たる味はひにて、これは云氣の心に扱ふ。このうつくしき、さきはさほど速からぬ呼掛なれば、仰山にならぬやう少く唯りと出、ワキとの同答は狂女物の趣を胸に持ちて、表裏直に氣に地み無く、左に「おは、おは」は充分興したる心にて、浮やかに扱ひ、其終局に目をつけての、閉合にかけては、順次氣をわけて溢ひ進む。忠告なれば、の出は十分に氣合せし、引き締め、地に渡す。法すみての調は

角田川

ヤリと見
えりなり
ます鏡
善く澄みて明なる鏡。思は増すと
東雲の空
あけが
浅茅が原
茅のまばらに
生ひたる原。

九番習
四番目
畧三番

早付

角田川

三月

子方
梅若丸幽室
ワシテ
梅若丸ノ母
早付
旅人思

こゝの武藏の國隅田川の渡守まへ。
今身舟を急かして入るを渡りやと
存い。又此在所よなる子細あつて。大
念佛を申す事のは向僧俗を嫌ひも
人数を集めぬ。其由皆心得し入
末も東の旅衣。末も東の旅衣目も

口等と次儀上

フヨク

角田川

下りぬと聞くより心私れつ。そなたと
あり。思子の跡を尋ねて。米よあり
千里を行くも親び子を忘れぬと聞く
ものや。上敷。契假あるら
せの契假あるら。其中をたよ
添ひもせ。や。親と子の
四鳥の別し。尋ねるは。のな

やらん。武藏の國と下總の中よあり
隅田にも著る。隅田にもあり
し。のな。母よ
棄せし給なら。おらに
り。方へ下り。都より入を
尋ねし。都の人の
る。おらに。自ら。見し。中。あり。

おはかきにて舟のきき舟をかゝるる
らたしやを隅田川の渡守をいひて

暮のぬ舟のきき舟をかゝるる
かたの如くも都の者ぞ舟をきき舟を
承る。隅田川の渡守をいひて
事な宣ひてそよ 都の入り
名の一買ひたぬいかに

其の舟のきき舟をかゝるる
かの業平も舟をきき舟を
しるる。都鳥我の思ひ入
あしやあしやの舟をきき舟を
鳥の目もたぬ。都の舟をきき舟を
あしやあしやの舟をきき舟を
沖の鳥をいひて

鳥かみく鷗かみくなむか田川

か田川鳥かみく都鳥かみく答入給さぬ

づも〜誤申したる名所はなぬ

らも〜都鳥かみく答入申たて

沖の鷗と浪の昔の業

平もあつちあつち〜

都の入を思妻あつちあつち〜

●仕舞

地拍子
ちりこ
やこ

子のま〜

志のび〜

都鳥〜

東路よ〜

も答ぬ〜

さ〜

〜

ちよみ葉をいさけぬまては都は自心
昔田の垣草かきハハの世に
かきよにけふはふんて世に
かきよにけふはふんて世に
かきよにけふはふんて世に
かきよにけふはふんて世に
かきよにけふはふんて世に
かきよにけふはふんて世に
かきよにけふはふんて世に
かきよにけふはふんて世に

給てこの世に
四五反唱く
ほら葉の
中も少く都の
昔縁あつら念佛
吊りさくも
ての葉ら

今日此處に留置せり。昔縁を
 ら念佛を由てあるに
 して花の如く。今母を
 急ぐ。あかしく。今
 物語を聞かす。今母の
 急ぐ。母を。今母の
 今物語に。今母の

今日此處に留置せり。昔縁を
 ら念佛を由てあるに
 して花の如く。今母を
 急ぐ。あかしく。今
 物語を聞かす。今母の
 急ぐ。母を。今母の
 今物語に。今母の

人ご此土を夜して今一度此世の染
 を母の目せせせ給へや上敷残つても
 ありあへくからんまゝしてありあへくから
 空しくてもありあへくまゝ本の見
 えつ隠れり風景のまゝあせの習
 人向られひの花盛無常の嵐音
 添ひま死長夜の月の影不意の雲

覆へりげり目の前の浮世あがりよ
 目の前の浮世あがり早稲今何れ馬敷
 ありあへくからんまゝ念佛を
 申あひして後世を待てりカレ上既よ
 目せ二風はなやあけ湯かゝる夜念
 佛の時節ありまゝと面とよ鉦鼓を鳴
 らしむむが母の餘りの悲し

都鳥も音を添へて南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

のう〜今の念佛のうちよ。ま〜

我らの聲の聞える。此塚のうちよ

あ〜げまよ。あ〜まおやまよ聞

ま〜。所詮此方の念佛を止めの

べ〜母御へ入声申へ。今一聲

こ〜聞かまほ〜南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

聲のうちよ。まほ〜見えけ〜

あ〜れ我ら子ら母よま〜ま〜

互よ手よ手を取り交せば又消え

消えとあり行け。あ〜もひハ

ま〜鏡。面影もまほ〜も見え〜

計けて、餘情あるやう納むべし。後には「思ひの露を」と云く以下読み無く、クセは詩に出、上端後文に連れての心持を好く留ひ表すこと大事なり。一「遠く真袖を」とは一声の調子にて華やかに大きく留ひ平りは重に束つて出て、「さきき」と乗りを鎮め、「ねの葉の」より常の調子に戻して悠々と留ひ納むべし。

注意すべき語の方

クマの中、「かの通照」は、前の落ちを受けて「ありかの」と真の下音にて留ひ、「かの」を火しも浮かさずして、下音より直に本張りに留ひ起すなり。常は中の浮き音の音を階級として張らものなれど、これは火しく特殊の扱ひなり。通照張りと林ふ。

藤咲く松と云

松に懸りて咲ける藤を雲の雲によそへて紫野、雲林院を尋ねんと意を照る。雲の林とは雲林院を詠みたる歌に用ひ別はしたる詞なり。

紫野は今、京都府愛宕郡大宮村の字に東葉竹大門といへるがそれなり。雲林院は其地に在る寺。今は唯観音堂一字を存するのみなり。古く勅願寺に列せられし著名の大伽藍なり。されども此地は其曲に作れらる如く、伊勢物語にも業平にも傳説にも處に非ず。これは源氏物語の作者紫式部の墓といふもの、紫式部にありより思ひつきて強ひて此地を遺ひしものか。源曲拾遺には伊勢源氏の二書を混同したるものと雖も、大和田氏の源曲伴叙にはこれを當時か、も傳説のありしなり。と

と辨護しあれど、前説は批難に過ぎ後説は底蘊に過ぎたり。津の國 摂津の國の古名。蘆屋の里 今の即（もと光原郡）攝津村。伊勢物語に「昔男津の國うばらの即、蘆屋の里にしりよ。公光 作者の假作のしいていきてほみけりしなり」とあり。在原業平の傳説の註なりしなるべし。

公光 作者の假作のあらしものとして蘆屋の里の若とせり。千載、後古今、玉葉等の歌の作家に中納言藤原公光、新後古今の作家に後由河院前右大臣藤原公光あり。これらの名に準へて作れるなり。伊勢物語

和歌を基として書き集めたる後片集なり。作者詳ならずれども、前記に在原業平の歌集様のものありしに後人餘事としてかへ事柄を潤飾敷衍して一部の物語と成したるなり。と云ふ平田篤胤の説當れるにちがひるべし。古は業平の自叙傳のやうに云ひなしたれば源曲は信之に授けり。

手馴れ 手にとり馴れたること。雲夢 雲霧に

花の新たに開くる 公光は

月は都 月宮殿によせて帝都を愛へる。我は東に云 公光は

蛭子の浦 摂津武庫野西の濱をいふ。西の海といひ

尼が崎 同國

あたりをとへば云 漁火の見ゆるあたりを向へ

今は現に都路 さいきの夢の若と今は現に見るといひかけて都路

遠かに人家をと云 和漢朗詠集の白樂天の句に「遠見

夕べの空は云 晴らんと

松の響 新後撰集に「峯高き松の響に

鶯の羽風 千載集の「梅が枝にふりつむ雪は鶯の羽風

心に憂き 心に憂き

素性法師 雲林院及び石上の良田院にありし僧侶。僧侶

春風は云 古今集に出でたる藤原好風の歌。秋意は惜む心には感の花も色のあせあるかと

千顆萬顆の玉 和漢朗詠集に「瑩日雲風鳥底千顆萬顆之玉

花物いはぬ云 和漢朗詠集に「誰謂花不語、輕漾激兮影動塵」とあるを引く。原句の意は誰か

また春の爲 和漢朗詠集に「また春の爲」とあるを引く。原句の意は誰か

東帯給へる 原作には「東帯し給へる」とありたるを後世其後音の

動詞的なるより思ひ違へぬに候りて侍らるる。根本 此には、在原の朝臣業平、阿保親王の第五子にて兄行平と共に在原姓を賜ひて故人。二條の后 藤原長良の女、清和天皇の中宮となし、近衛の中將たりしかば、在原中將と在中將といふ。伊勢物語を授けん 伊勢物語の秘事を侍授するも、途中に捕へられしこと伊勢物語に見ゆ。また寝 再び更に。昔男 伊勢物語の秘事の初に「昔男風習ありければ、それに従ひて作れり」と。夕げえ 夕日の光の移るを云ふ。花をいし思ふ 前年の古ひたる由を云へるを受け、古今集に「年古れば髪は老いぬ。木隠れの月、花の陰 後撰集に「春しかはあれど花をいし見れば物思ひも無し」とあるを引けるにや。花衣 前の歌を受けて、次は多き夕月夜おぼつか。惠衣 惠する人の衣をいふことには、詞の後といたる外深き意無し。昔 春れなくも花陰にして。花にうつらひ 花やかに美しきを、嘆き句へ連鎖に用ふ。花見も人 暮れなばなけの花の陰は、火し更へて候る。花衣 前の歌を受けて、次の衣などいふ詞。月やあらぬ 伊勢物語に、五條の太右衛門の宮の西の對に居給ひし藤原高子の年の正月、そこに行きて去年を。雲の上人 大宮。花にうつらひ 花やかに美しきを、嘆き句へ惠ひて誦めりといふ業平の歌。弘徽殿の云 弘徽殿は昔の内裏の建物の一、清涼殿の北にあり、細殿はなり。これは源氏物語花宴の巻に、源氏の后弘徽殿の細殿にて、龍月の内侍に建ひ給ひしこと伊勢物語に引くことと、艶に書きたるを借り、業平と高子との事柄に引きたらなり。心の下 密に思ふを下着(車)の簾の下にかくる(きれ)。共にあくがれ 二人共にうか。きさささや 二月の黒名。新後撰集の西宮法師の歌「きさささの半の空の夜はの月入りしあとのやみどかき」と更へて用ふ。日本の本の中に名所といふ 所謂伊勢物語の秘

事口侍なり。それによれば、業平東に下れりと云ふは物語の作り事にて、實は東山に發居せしをあげまに下ると作れるにて、又三河の八幡とは八人の女に擬したるものと云ふ。難義秋、冷泉流注等などに出づ。これにより、日の本國中の名所は、皆大内(内裏)にありと解けるなり。今より、かの遍昭が、宗貞見れば、採らに足らざれども、こゝには此秘事を授けたりと云ふ。か、の遍昭が、宗貞と云ひ、當代の故人。後佛門に入りて遍昭と云へり。其遍昭の連ねし詞とは、古今集に「散りぬれば後は芥にならる花を思ひいらすまじとてみ哉」とある歌をさす。芥川 伊勢物語に出づ。冷泉流注伊勢物語の註に「芥川といふは津の國あくた川にはあらず、内裏にあり、これは常寧殿の下より流れ出で、朝およめの塵はきき入りなり。紅葉重 衣の色目の名。表紅に裏青。緋の袴 紅の精好にてつ。踏みしだき 踏みしを。まの男 伊勢物語にあり。實意のある男の意。それ用ふ。紫の一とと 古今集に「紫の一本ゆゑに武藏野の草ははらあらはれとを見る。源氏物語取合せて藤袴(山野に自生して小形の淡紫色の花を開く草。しをる 萎ゆる。信濃路や 信秋の七草の一)と呼起す。藤袴は亦、薄紫の指貫(袴の一種)の袴。しをる 萎ゆる。信濃路や 信濃國原(美濃、信濃兩國の境にあり)は本職の名産地。夫木抄 本職色の袴衣。袴衣はもと袴に用ひしものなり。巾子 冠の頂に高く突。うちかづき 引きかぶり。黄昏 後に通常官服に用ひられし袷の一種。月 夕暮。降るは春雨か 古今集に「春雨のふるは涙か揚花散る。山藍の羽袖 名残の月にて山藍を出す。山藍は藍草にて搦りたる小忌衣にて、前會に舞姫の用。返すや夢の告 袖を返す。再び夢の告に違ふとを思ぬ。夢をみんと思けぬ夜の衣をかへして寝ぬといふ故事。即ち古今集の小町の歌「いとせめて悲しき時はうは玉の夜の衣をかへして寝ぬ」の心を以て、袖を返すと夢との連鎖とせ。黄楊の枕 新古今集に「曉とつげの枕をそばたてしな。松の葉の云 ちりうせず、まさきの

かづら長く傳はるしとあらを伊勢物語の長く
傳はることに云ひ、末の世までと續けたる。
言の葉ぶさ
歌詞の意、列の意を
以てかりそめに續く。

四番目
畧三番

雲杖院

二月

シテ在原業平ノ靈(前老翁)
ワキ公光

口次券上
ヨウク
藤咲く松も此糸の藤咲く松も此糸の
雲の杖を尋ねん
屋の里よ公光と申ま者よてい。あれ幼
かり一頃よりも伊勢物語を手馴れい
所よ。あの夜不思議ある雲杖を業平
この程よ。唯今都よよらたやと存る

花の新アノは開ヒく日ヒト初陽ハツヨウ回マり鳥の
 老オシと帰カエる時トキ薄暮ハクモ陰カゲれ春ハルの夜ヨの
 月ツキの都ミヤコは急イサぎあり
下歌 葦アシ屋ヤの里サトを
 みる出デでいあれ東ヒガシは赴イダけバ名残ナノコの
 月ツキの西ニシの海ウミの蛭ヒル子の浦ウラ遠トホく汐ウシの
 蛭ヒル子の浦ウラ遠トホく
上歌 松マツ蔭カゲは煙ケムリを被カく
 尾オシ崎サキ煙ケムリを被カく尾オシ崎サキ暮スれて見ミえ

たる漁イサ火ヒのあたるをヲ難ナシ波ナミ津ツよ
 嘆ナゲくやこの花ハナ冬フユごもり今イマの理コトよ都ミヤコ
 踏フミの遠トホかりト程ほどの櫻サクラはままだれあは雲クモの
早かん上 林ハヤシは著ツキまよけり雲クモの林ハヤシはつまよけり
 遠トホよ人家イノチヤを見ミて花ハナあれが即スグちの
 あれごと本ホン蔭カゲはまを寄ヨり花ハナを折オリが
早かん 誰タレそやま花ハナ折オリるひあ朝アサの霞カスミ消ク

錦ニハナトシある。錦シロなる旅人シロ身シロの何方ナニノカタより

来り給キタよぞ。此コノ津ツの國クニ蘆アシ屋ヤの

里サトよ。公キミ光ヒコと申ウき者モノとていふイら。あれ幼コか

り。頃トキも伊勢物語イセノモノガタリをシ手テ馴ナれい

所トコロよ。ある夜ヨの夢ユメよ。ある花ハナの蔭カゲ

よりヨリも。くわあるの袴ハカマ召メしたる女性メノコ。

東トウ帯オビ給キ入ルる男ヲ。伊勢物語イセノモノガタリの草紙クサシを

考カウていハま
幼コかりカ頃トキよりヨリも
花ハナの蔭カゲよりヨリも

持ち佇タツみ給キよ。あたりよありつゝ翁オキナ

よ回マり。あるも伊勢物語イセノモノガタリの根本ネコト。

在中ナカニ将シヤウ業ヤウ平ヘイ。女性メノコハ二條ニジョウの后キミ處トコロハ都ミヤコ

北キタ山ヤマ陰カゲ紫ムラサキ野ノ雲クモの林ハヤシと語カトつて目メみて夢ユメ

覺サトめぬ。餘ヒヨクつよあらたある事コトとてい

程ほどよ。こゝまが集ツつていハる。たゞし身ミ

の心を感カづく。伊勢物語イセノモノガタリを授タテマげん

夢を待ち給へ
 下子袖をわたさば別して見し
 花衣を重ねつゝまた寝の夢を待ち
 給へ
 委しく教給へ馬身
 らん 其様年のさびやも昔思ふごと

知らぬ
 いや
 を何と夕映の花を思ふ心ゆゑ本
 隠しの目も理しぬ眞子昔を憶衣
 一枝の花の蔭に寝て我が有様を見
 給へ
 其時不審を晴らさしこと夕子の
 空の霞おもほさばあはれ

あつたはらうとてあつたはらう

中入

早上校
(三人)
待話

つたはらうとて本蔭の目よ針とて見ん

打切

本蔭の目よ針とて見ん暮れあぶ

あげの花衣袖をかたき針とて見ん

袖をかたき針とて見ん月や

あらぬ春や昔の春あらぬ我が身一

つたはらうの身よとて不思議なる

雲のよ入白やとて見ん
給よとて見ん

今に何とて見ん昔男の若くを語
らしたあつたはらう

中よ伊勢物語の其品を語り給へ

どでとて見ん語らんと花の嵐も
聲添へて其品を語り給へ

かいとうて マニマニ 信濃路や 地ノ 園原茂の
 本賊色の狩衣の袂を冠の中子よ
 らちあづき忍び出づるや二月の黄昏
 月もはや入りて ハ 臙夜は降る
 春雨は落つるハ涙かと袖うち拂ひ
 裾をとり ハ 志をくまきく ハ たどり
 たどりも ハ 迷ひ行く ハ 思ひ出でたり

●仕舞
 序ノ舞
 打上打返(字)
 キリ上

夜遊の曲 ハ 返も真袖を月や知る
 夜遊の舞樂も時移れば ハ 夜遊の舞
 樂も時移れば ハ 名残の月も ハ 山藍の
 羽袖返もや ハ 夢子の黄楊の枕 ハ 此物語
 語のとも書 ハ 松の葉の散り
 失せぞ ハ 松の葉の散り ハ 失せぞ ハ 末の
 せまでも ハ 情知る ハ 言の葉 ハ 草の ハ のりそ

めよ。かく著せらるゝの伊勢物語。
 かなる夜もさかづき覺えむ夢もあ
 り。けりや覺えむ夢もあ。り。けりや。

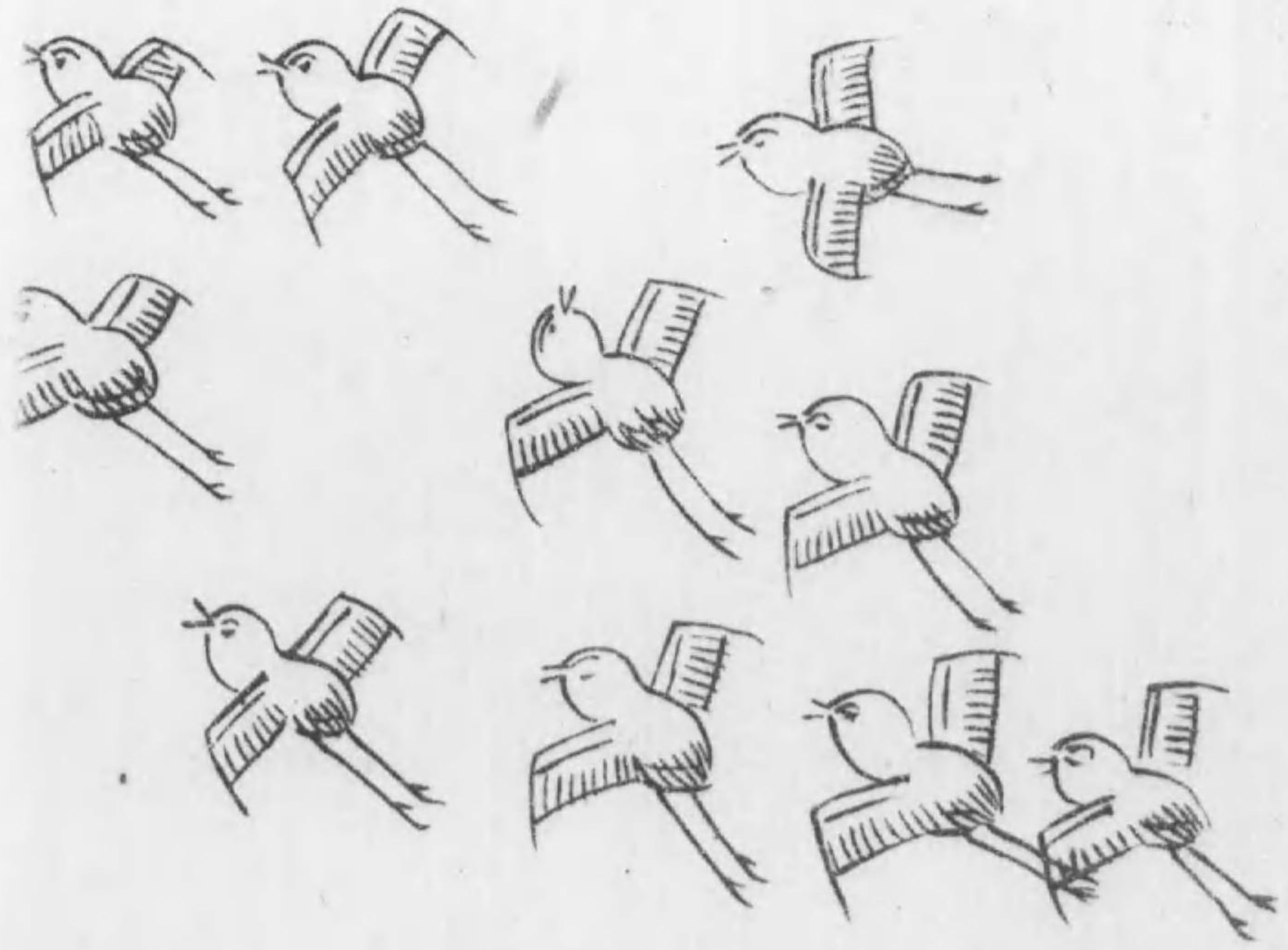
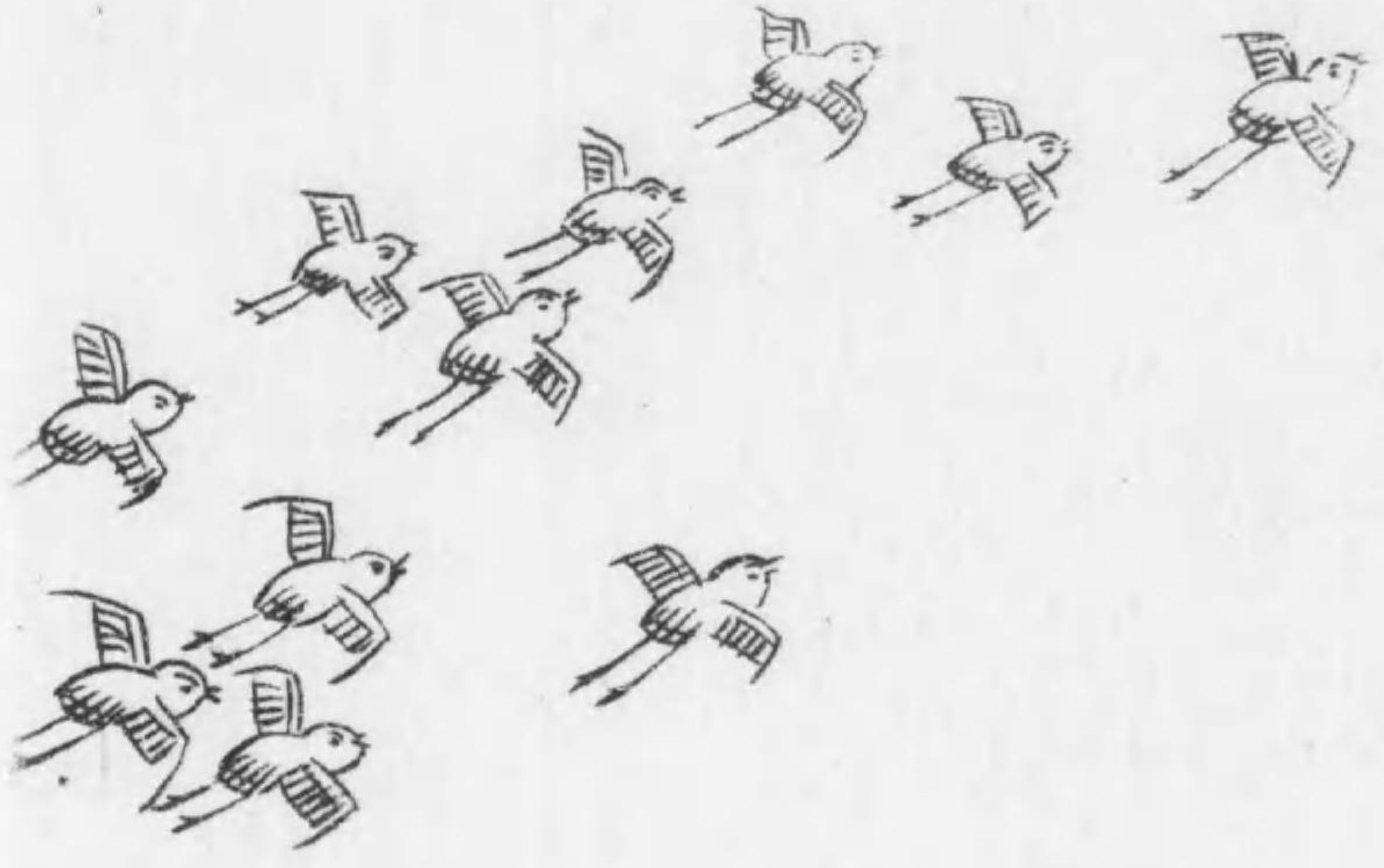
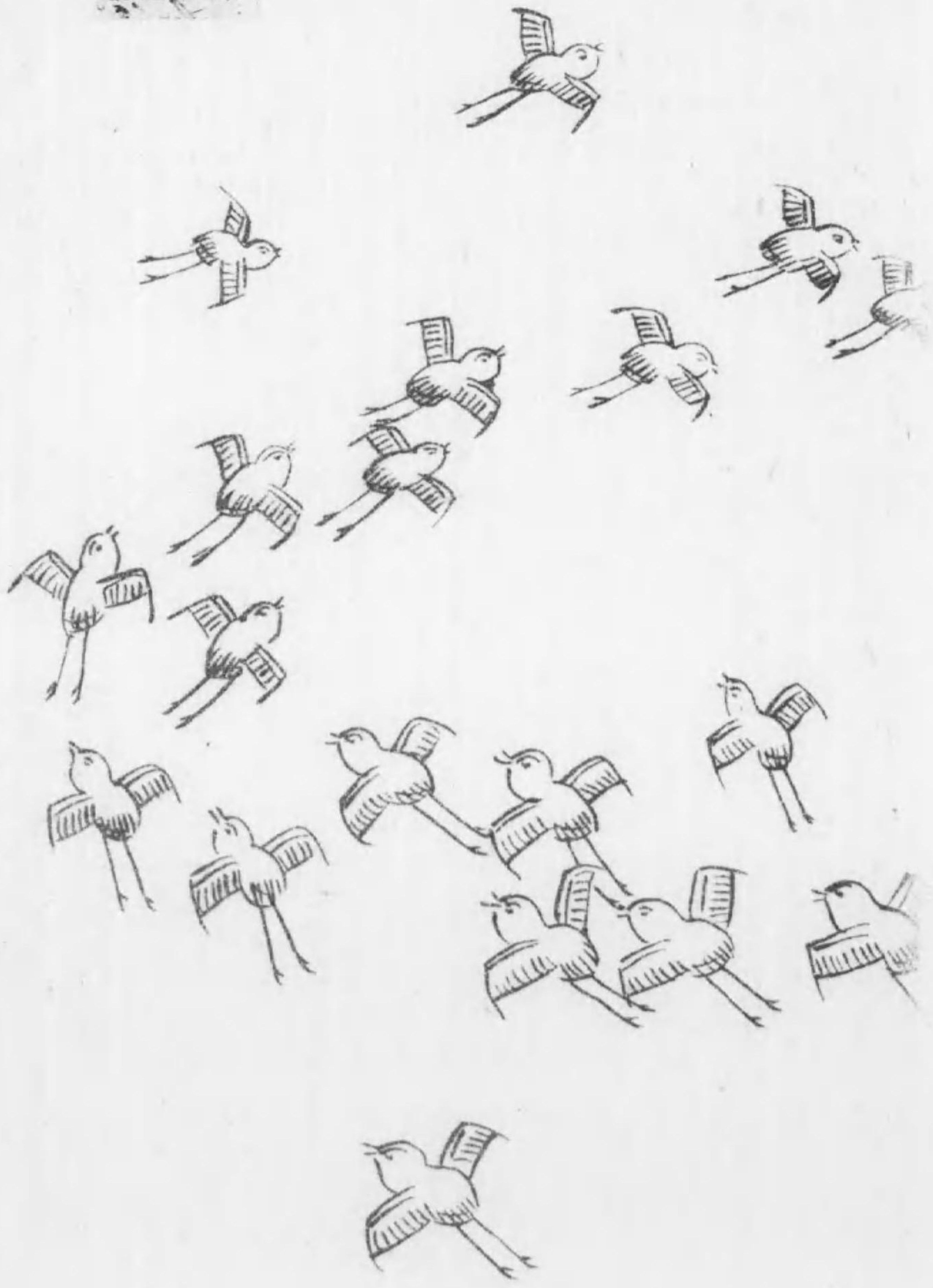
大正十年九月十日印刷
 大正十年九月十五日發行

觀世流改訂謄本
 第四版・大正版



訂正者 丸 岡 明桂
 相續者 丸 岡
 發行所 東京市神田區今川小路三丁目九番地
 發行所 土居源太郎
 東京市神田區東松町十二番地
 印刷所 鈴木本舖
 東京市神田區東松町十二番地
 印刷所 信英堂印刷所
 東京市神田區今川小路三丁目九番地
 發行所 觀世流改訂本刊行會
 電話九段 二三〇五番
 報替東京 一三四七五番

Handwritten text in a decorative square frame, possibly a date or page number.



終

